

福岡市文化芸術振興財団とニコちゃんの会では、2017年から協働して、演劇プロジェクトや重い障がいのある子どもたちを対象とした「アウトリーチ事業」を実施してきました。しかし、コロナの影響で、新しい取組みを模索する必要が生まれます。

新たにanno labも加わり、そんなコロナの真っ只中にスタートしたのが、「ニコちゃん meet with あのラボさん!!」です。このプロジェクトの過程を一言で表現するなら、まさに激動の3年間... そこで巻き起こったさまざまなすれ違いや不安、気づき、試行錯誤、ワクワクの「あゆみ」の一部をお伝えします!

プロジェクト開始前

Episode.1

今だからこそ
やらなくちゃ!

緊急事態宣言が終了し、コロナが少し落ち着いた頃でも、ニコちゃんの会では感染対策に余念がありませんでした。接触は最小限。しかも外出もできない。だからこそ逆に、「施設の中で楽しみを見つけたい」「やれる範囲で何かやろう」という貪欲な思いがありました。そんなとき財団からの声かけが。

Episode.2

anno labとの出会い

元々、重い病気や障がいがあり、演劇公演に参加できていなかった子どもたちと新しいやり方のアートにチャレンジしたいと考えていたニコちゃんの会。そこでこの機会にオファーしたのがanno lab。スタッフの1人が「日常のとなり」をテーマにした個展でメディアアート作品に触れ、「anno labの世界と子どもたちがつながると面白い」と感じたのがきっかけでした。



2021 プロジェクト1年目

Episode.3

メディアアート、
もうここにあるじゃん

「メディアアート、もうここにあるじゃん」。子どもたちやニコちゃんの会を知らず知らずのうちに、anno lab が感じたことでした。メディアアートを広く捉えようと、人とモノの間にあるものを真剣に考えていくこと。そういう意味で、自分たちがいなくても既にメディアアートが成立していると感じたそうです。だからこそ余計に、「子どもたち自身が楽しむことにフォーカスすること」に注力したアクティビティを実施。自分たちとしては良い場になったと感じたけれど...

Episode.4

未知との遭遇から
はじめた

普段から創作活動を行っているものの、メディアアートは初体験のニコちゃんの会。一方、重い病気や障がいのある子どもたちとのコラボは未知の領域のanno lab。「こうなったら成功 / 失敗」というゴールが誰にもわからない中でのスタートでした。日程調整、感染対策は大変。心拍とタッチセンサーを使用したアクティビティにニコちゃんの会のスタッフたちは大混乱。「なんだかすごいけど、自分たちは受け身でやっているだけで、よくわからなかった」という感想が。

2022 プロジェクト2年目

Episode.5

もっとお互いを知ろう

1年目の反省を踏まえて、「もっとお互いを知ろう」という話に。福岡市科学館で anno lab のさだむさんがアートに対する価値観やスタンスについて話をした際、それまで「ようわからん」と言っていたニコちゃんの会のスタッフが、「なんでも協力するよ!」と変化。anno lab も現場を訪問。少しずつ協力体制が深まってきました。

2023 プロジェクト3年目

Episode.6

ケアコミュニティハウス
「ニコちゃん家」の完成!

ニコちゃんの会の事務所と通所施設が移転。それまで感染対策の一環から、アクティビティ当日の参加者数を限定していましたが、スペースが広がったことで、より多くの人参加、体験できるように。特にニコちゃんの会は、「今まで一部のスタッフしか参加できなかったけど、やっとみんなに伝えられる!」と感じられたそうです。



Episode.7

現場力が生きた
コラボレーション

3年目のアクティビティは、お互いが作ったものを融合し合えたら面白くなる!という思いから、anno lab がソーロープを提案。お試し会では回転速度が上がるにつれて円盤の上に配置したものが飛び散ることも。その打開策になったのが、木工用ボンド!このアイデアはニコちゃんの会が主催する別のイベントで作業を行う際にたまたま思いついたものでした。

Episode.8

子どもたちの身体や感覚
から拡張したところに
スタッフがいる

「ニコちゃん meet with あのラボさん!!」では、毎年、関係者で振り返りを行ってきました。3年目の振り返りの際、「1年目はスタッフさんを置いてばかりにしてしまい、子どもたちだけの身体や感覚から拡張したところにスタッフがいるのだと後から気づいた。そのスタッフさんが不安に思うということは子どもたちも引っ張られるだろうと。そういうもどかさ、もっとうまくできるだろうというモヤモヤ感があって、もっと知りたくなった」と anno lab のさだむさん。

激動の2年間!(令和3~4年度) 振り返りトークMovie



福岡市文化芸術振興財団 (FFAC)

ニコちゃんの会

anno lab (あのラボ)



アーティスト
あのラボさん



ニコちゃん
ゆうまちゃん

ニコちゃんの会
スタッフ

通所施設「ニコちゃん家」に通う子どもたち(ニコちゃん)。重い病気や障がいによって大きな動きや声を出すことは難しいですが、舌の動きやまばたき、視線の微妙な揺らぎを感じながら、子どもたちとケアスタッフ、アーティストがともにメディアアートのさまざまな遊びを展開しました。その3年間のあゆみを振り返ります。

ニコちゃん
よしくん

認定NPO法人
ニコちゃんの会

「どんなに重い病気や障がいがあっても、その人らしく豊かに人生を生き抜くことができる社会」を目指し、様々な活動を展開している。障がいのある個人に直接的に関わる事、彼らを含めた社会全体に関する事の、両側面からのアプローチを行う。主な活動に、身体的にバラエティあふれるひとたちの演劇公演、ケアコミュニティハウス「ニコちゃん家」運営、ニコサンタ、いぶんノート企画共同開発、ファミリーメンタルサポート等。

【お問合せ メール info@nicochan.jp / TEL 092-834-5182 (平日9:00~18:00)】

anno lab

福岡を中心に活動するクリエイティブ・ラボ。「楽しさ」「知的好奇心」を中心としたクリエイティブを心掛ける。2021年、雑誌「Pen」によりPen Creator Awards 2021に選ばれる。2022年、作品「太陽と月の部屋」が文化庁メディア芸術祭アート部門大賞を受賞。

【お問合せ メール anno@annolab.com / TEL 092-775-3962】



福岡市文化芸術振興財団

福岡市における文化芸術の振興を図るための事業を行い、市民の充実した生活の実現と高い市民文化の創造に寄与することを目的に、1999年3月に設立されました。文化芸術は、すべての人の生活の中にあるもの。「アートと市民をつなぐ」を目標に、発足以来、1人でも多くの方が身近に文化芸術に触れ、感動し、熱くなる「きっかけ」を提供しています。

【お問合せ メール ffac-02@ffac.or.jp / TEL 092-263-6265 (平日9:30-17:00)】



2024年1月28日発行

主催 (公財) 福岡市文化芸術振興財団、福岡市

協力 anno lab、認定NPO法人ニコちゃんの会、NPO法人ドネルモ

デザイン 河村美季

2021



2022



2023



出会い 未知との遭遇

心拍、タッチセンサーを使った、音と光のインスタレーション

今回の取組みの中心であるゆうまちゃん、ゆうくん、よしくんの3人は、2021年10月、初めてanno lab(あのラボ)と出会いました。(1)「3人の好きなものは?」「いつもどんな遊びをしている?」「anno labさんはどんな作品をつくっている?」など、まずはお互いの自己紹介からスタート。その後、子どもたちの微細な発信や反応が魅力的な表現として空間に広がること、子どもたちに「ワクワク」が生まれることをイメージしながら試行錯誤。(2)そうして出来上がったのが、心拍をキャッチするセンサーや人と人が触れることで反応するセンサーを使った、音と光のインスタレーションでした。「ドン・ドン・ドン」と心拍がドラムの音として広がり、3人にタッチすると「ポロン」とピアノ音やカラフルな光が流れ星のように流れる幻想的な空間になりました。(3)ただ、暗がりでの実施によって子どもたちの表情が見えなかったことや、心拍やタッチの「インプット」と音や光の「アウトプット」の関係が複雑でわかりにくいなどの課題も。

振り返り

「子どもたちがどんなことを知覚できているかわからない分、作品の説明をしっかり行いたい」というケアスタッフと、「子どもたち自身が楽しめているはずだから、『わからない』をわからないままに、その場を五感で楽しめたらいいのでは?」というアーティスト、双方の意見が出ました。

幻想的で美しい体験のようでいて、その場自体が、「子どもたちと楽しむ」ことにつながっているか、「ワクワク」しているか改めて、アーティストとスタッフで話し合うことになりました。

作品の仕組みを理解する時間が少なく、ケアスタッフは取組みの進行に戸惑いを感じていた。その不安感が子どもたちにも伝わったのではないかな?

明確で短い「アウトプット」でないと、障がいのある子どもたちは気づかない可能性もある?逆に刺激(アウトプット)が強すぎると身体への影響が心配。

重い障がいのあるゆうまちゃん、ゆうくん、よしくんから、「言葉」によるフィードバックはないけれど、子どもたちの「楽しむ力」を信じたい。

出会い直し 日常のとなり

透明ビニール傘を使った、タッチセンサーによる音と光のアート

2022年3月、アーティスト、ケアスタッフ、財団(FFAC)で話し合いを実施。その結果、「もっとお互いの考えや背景を知った方がよい」という結論に。そこで、ケアスタッフはメディアアート作品の体験と、アーティストがどんな思いで作品に向き合っているかを知るため、anno labの展示会に参加。(4)かたや、アーティストは、ケアスタッフが子どもたちどのように接し、どんな関係性を築いているのかを知るため、普段の施設を訪問。(5)お互いをより深く知ることで、《アーティスト》と《ケアスタッフ》の距離が近づいていきました。重い障がいのある子どもたちにとって、医療・福祉ケアを行うスタッフたちは切っても切り離せない存在。子どもたちが楽しんでいるか

振り返り

子どもとケアスタッフと一緒に楽しむことが、ニコちゃんの会でも大切にしていること。シンプルではっきりとした「インプット」「アウトプット」によって、お互いの表情を感じることができたアクティビティになったという感想が聞きました。一方で...

ケアスタッフへのヒアリングを聞き入れすぎると《アート》ではなく《デザイン》になりすぎるのでは?

子どもたちに「聞いてみる」、子どもたちと「一緒につくる」時間をもっと必要だったのでは? 子どもたちにもっと深く関わってほしい!

このアクティビティを他の福祉事業所、重い障がいのある子どもたちに広めようとした時に、どのように伝えればいいのか?

新たな課題が見えてきました!

どうかわかりづらいからこそ、同じ時間と空間を過ごす大人たちもリラックスして楽しめたら、より一層「ワクワク」が生まれやすい場になるのではないかな。そのためには、「アクティビティの時間」をはっきりと設けるのではなく、子どもたち一人ひとりのタイミングに合わせて、普段の遊びの延長としてやってみようということになりました。そうして試作を重ねて(6)出来たのが、普段の遊びでも活用している「透明ビニール傘」を使った音と光のアート。(7)(8)「インプット」はタッチ。「アウトプット」は音と光。昨年度よりもシンプルな構成になったことで、子どもたち・大人たちがそれぞれの表情を見ながら、触れ合い、音と光を楽しむアクティビティになりました。

アーティストと子どもたちのコラボレーション

ゾートロープ体験 & お披露目会

3年間のプロジェクトの集大成として実施したのが、アニメーション表現の一つである「ゾートロープ」※を活用した遊びの体験でした。アクティビティの初日は、anno labと一緒に、みんなでどんなものを置くとどんな動きになるのかを確認。(9)ベッドの上の子どもたちにもゾートロープを見えやすくするため、鏡を使うなど工夫しながらコマ送りのように動くアニメーションを楽しみました。(10)それからお披露目会までの間に、子どもたちとニコちゃんの会のケアスタッフで、円盤上にお花や絵、子どもたちが好きなものを一定の間隔で並べた、思い思いの作品を共同制作しました。(11)そして2ヶ月後、anno labと一緒にそれぞれの作品がどんなアニメーションになるのか、お披露目会がスタート!(12)(13)例えば、ゆうくんの作品は「花火」で、中心からカラフルな花火が広がる絵をケアスタッフと一緒に制作。その他にも、みんなの前でニコちゃんの会に通う子どもたち、大人たちの各々の作品が披露されていきました。この日は、これまでアクティビティを行ってきた会場よりも広く、コロナも落ち着いたことから、ニコちゃんの会のケアスタッフだけでなく、事務所スタッフも参加。大学院生の見学者やFFACの広報担当者など、たくさんの関係者とアクティビティを共有することができました。お披露目会では、仰向けでも見やすいよう、天井にスクリーンを投影し、一緒に鑑賞。ゆうくんが作った花火の作品が動き出すとその場にいた一同が「おー!」と盛り上がり、ゆうくんも、一緒につくったスタッフも、誇らしげな表情でした。

※ ゾートロープ … 円盤の上に少しずつ違った「動き」を表したものを置いて、スリットを通して見たり、フラッシュをたき、光が点滅した状態で見ると、ものが動いたように見えるというアニメーション表現のひとつ。

Comment 関わった人たちの変化や気づき



あのラボ 藤岡定さん

子どもたちと作品を通して語り合う体験はとて新鮮で楽しい時間でした。同時に、子どもたちだけを見てアクティビティをしてもうまいかなと、僕たちは学びつつ、僕たちが普段どんな思いで活動しているのかをスタッフさんたちにも理解して頂きつつの、相互に色んな発見をしあう場だったなと思います。



ニコちゃんの会 福田万由未さん

緊張もするし、いいところを見せたくなったりもする、気まづくなったら目を背けたりもする、褒められたら照れくさくなる、そんな子どもたちの「子どもらしさ」に改めて気づいた時間でした。そして立場が違えば捉え方が違い、人と人が歩み寄ることの難しさと尊さを痛感した学び多き3年間でした!



FFAC コーディネーター 藤友里江さん

この子と、この人と「わかり合いたい」「ワクワクしたい」を諦めずに、大人たちも本気であそび、目に見えないものを確かめ合いながら進めた過程はとてクリエイティブなものでした。これで完成!というわけではないですが、アートを通した一つの関わり方が見えてきたのかなと思います。

振り返り

ゾートロープ自体の面白さとともに、anno labとニコちゃんの会、子どもとスタッフのコラボレーションがたくさん生まれる場となり、メディアアートの本質の部分を体験できるアクティビティだったという感想が聞けました。

ゆうくんの感情をキャッチできることはそう多くない中で、今日はすごく笑っていたのを感じられたのが嬉しかった。

見学者感想

- 3年間の積み重ねがあつてこそ今日。この熱がどんどん高まっていくことに興味を持った。
- アーティスト、スタッフが子どもたちのことを話している姿、その饒舌さにあらゆるものが詰まっている気がした。



木工用ボンドを使ったゆうくんの「花火」

絵がずれず、はっきり色が出てくるようにする木工用ボンドを使ったアイデア、ゾートロープの映像を天井に映すとアイデアなど、普段子どもたちとクリエイティブな遊びを重ねているニコちゃんの会だからこそその現場力がいくつも発揮された。

3年間の集大成 だったからドキドキしていたが、大成功に終わってよかった。スタッフもお披露目会だけでなく、作品の制作過程から面白がってくれた。子どもたちのワクワクもキャッチできる瞬間が確かにあったアクティビティだった。

ゾートロープが不思議で見えるものが途中から変わるのも興味深かった。狙った絵とずれている絵と、順番順番に出てくるのも面白かった。